

民主化以降のウルグアイにおける政治家と軍人

Politicians and Military after Democratization in Uruguay

内 田 みどり

Midori UCHIDA

(和歌山大学教育学部)

2016年10月6日受理

Abstract

Prevention of coups d'état and establishment of civilian control had been anxious by newly democratic government in Latin America. How politicians could make change the mission of military and make good relationship with military. A Uruguayan investigator, Fernando Amado analysed relations between government and military focusing on promotions of generals and commanders after democratization in Uruguay. This article, based on study of Amado, would attempt describe characters of successive government and point out an paradox which exist between former enemies.

はじめに

2016年8月5日。一人の男がウルグアイの海軍病院で亡くなった。エレウテリオ・フェルナンデス・ウィドブロ (Eleuterio Fernández Huidobro, 1942–2016)、享年72。前半生を武装都市ゲリラとして軍と戦ったが、最後は国防大院としてかつての敵を擁護する側に回った。「世界一貧しい大統領」José Mujicaの盟友であり、獄中にあった軍政時代は、ともにゲリラの襲撃があったら即座に殺される「人質」の一人として、苛酷な人権侵害をたえしのんだ。ゲリラ時代の回顧録や官僚制批判など政治を分析した著作も数多くものした知識人でもあった。

軍事政権から民政移管したラテンアメリカの多くの国では、クーデターの再発を抑えることが文民政権にとって大きな課題であった。そのため、軍事政権時代の人権侵害が不問に付される時代が長く続いた。なかでもウルグアイは、「失効法」といわれる免責法を2度、国民投票にかけたが僅差で無効化に失敗しており、最高裁での失効法違憲判決は出たものの、軍政時代の人権侵害への時効不適用法にも違憲判決が出るなど、この問題への取り組みが最も遅れている国である。一方で、元ゲリラの政党を含む左派連合の拡大戦線 (Frente Amplio) の政権が三期目を迎え、ラテンアメリカで最も政党政治が安定している国である。それは人権侵害を免責したからなのか。それとも政治家たちが文民統制に成功したからなのか。本稿では、民政移管以後のウルグアイの政治家と軍の関係を将軍・司令官昇進人事の観点から考察したフェルナンド・アマド¹に依拠して、民政移管以後のウルグアイ軍部について

簡単な描写を試みる。

1. 軍部の自律性を巡る議論

筆者はかつて、ポスト冷戦期のラテンアメリカにおける政軍関係についてパイオン・バーリンが「軍が制度として自己決定を行えること」を軍部の自律性として定義し、それを図る指標を上げた議論を紹介したことがある²。その指標は①上位ランクの昇進人事の決定権、②兵力の規模、③軍人の教育と安全保障ドクトリンの策定、④軍の改革、⑤中央政府の歳出に占める軍事費の割合、⑥兵器の生産と調達権限、⑦国防大臣の任命権限／陸海空それぞれに大臣を置くか、三軍が一括して国防大臣の下にあるか、⑧情報収集活動の統制、⑨国内治安に関わる軍部の権限(軍部が自由に決定できるか否か)、⑩人権侵害に関わる裁判管轄権(文民法廷か軍事法廷か)であった³。パイオン・バーリンの分析では、1992年の時点では、ウルグアイの軍部は兵力レベル、軍事予算では自律性が低い、教育や軍部ドクトリンの策定、国内治安問題への関与、人権侵害問題では依然として高い自律性をもつとされていた⁴。

1-1. ミッションの再定義：PKOへの参加

冷戦終結とともに、「国内の共産主義第五列」と戦う軍・警察という「国家安全保障ドクトリン」は正統性を失った。軍は新たなミッションのもと、イメージを回復する必要に迫られた。

メキシコやコロンビアと異なり、民政移管当時、麻薬がらみの組織犯罪に悩まされていたわけではないウルグアイやアルゼンチンの軍の新たな任務として浮上

したのは、国連平和維持活動への参加であった。テキサス大学サン・アントニオ校のソトマヨールによれば、1992年カンボジアに部隊を派遣して以来、ウルグアイはコンスタントに派遣を続け、特に2000年以降は1,000~2,500人規模で部隊を派遣している。特にバスケス政権下で最大化している。コンゴ民主共和国のPKOでは主力部隊だった。ウルグアイの側からみると、軍の5%をPKOに派遣していることになるという。また、ウルグアイは港湾管理や海岸の環境保全・汚染防止、文民警護など様々な任務がこなせる、ラテンアメリカでも数少ない国なのだという。

だが、PKOは要員がかかわる性暴力が近年大きな問題になっている。ウルグアイも例外ではなく、コンゴ民主共和国では汚職、ハイチでは性的虐待の疑いが要員にかけられ、ハイチでは現地民衆の反対運動で撤退を余儀なくされた⁵。それでも、国連によれば2016年8月末時点で、ウルグアイは警官8名、軍事専門家24名、兵員1,425名をPKOに参加させている⁶。

1-2. 人権侵害問題と軍部反乱の危険

民政移管後、軍事政権時代の人権侵害被害者・家族による加害者訴追の動きが活発になったが、これがクーデターを誘発し、生まれたばかりの文民政権を危うくすると、民政移管直後には加害者の免責を正当化する議論があった。

実際、アルゼンチンでは、軍事評議会の高官たちへの裁判は実行できたものの、顔を戦闘用に黒くカモフラージュした「カラピンターダス」(Carapintadas, “painted face” という意味)と呼ばれる下士官のグループが何度か反乱を起こしている。1987年4月にアルド・リコ(Aldo Rico)中佐が起こした最初の反乱で脅かされたアルフォンシン大統領(任期1983-1989)は、上官命令に従って人権侵害を行ったものは免責するという「服従法」を成立させた。リコは軍規律違反のかどで逮捕されたが、辞職せよという圧力と拘禁を逃れるために1988年1月に再度反乱を起こしている。さらに同年12月にも、極右軍人セイネルディン(Muhammed Alí Seineldín)大佐による反乱が起きた。いずれの首謀者も有罪となったが、1989年10月にメネム大統領(任期1989-1999)によって恩赦されている。1990年12月にも反乱が起きている。最後にしてもっとも暴力的と言われた反乱は軍内忠誠派に即日制圧され、セイネルディンらには終身刑を含む長期刑が科せられた。ちなみにメネムは同じ年に有罪判決を受けた軍事評議会メンバーを恩赦している⁷。

軍部の政治関与を制度化した改憲草案が1980年の国民投票で否決され、その後軍部と政党の交渉によって1985年に民政移管したウルグアイでも、多くの人権侵害加害者が訴追され、1986年12月までに約700の事件が調査対象になっていた。だが、当時の軍司令長官のメ

ディナ(Hugo Medina)は「召喚状を自分の金庫にしまいこむ」ことで政府に公然と反抗した。他方、サンギネッティ大統領(任期1985.3-1990.2)は軍事政権下での軍・警察の人権侵害を免責する「失効法(La Ley de Caducidad)の成立をもくろみ、野党の国民党を説得し、1986年12月22日にこれを成立させた。メディナは1987年に国防大臣に就任している⁸。

民政移管後のウルグアイの政軍関係を分析したフェルナンド・アマド⁹によれば、ラカジェ政権発足から26か月の間に、輸入会社の玄関先、ムスリム宗教センター、左派連合の拡大戦線を構成するマルクス主義政党「人民の勝利のために」(Partido por la Victoria del Pueblo)の下院議員ウーゴ・コレス(Hugo Cores)の自動車(爆弾で粉々になった)、サンギネッティの関係する法律事務所、ミナス近くの鉄道橋に爆弾がおかれるという事件が起きたという。これについては、アルティガス警備隊(la Guardia de Artigas, アルティガスはウルグアイ独立の英雄)を名乗る軍人グループが正体を隠してオブセルバドール紙の記者と接触し、「クーデターを意図しているわけではないが、爆弾を置いたのは人々や政党指導者にこの国の現状を理解させるため」だと述べた。サンギネッティを狙ったのは彼が軍を弱体化させたからだとも述べている。このグループは現役の軍高官の集まりや大統領公邸、国会議事堂の委員会ビル、検事私邸にも爆弾を仕掛けたという¹⁰。さらに、国防大臣や当時管理支援部隊の長だったフェルナン・アマド(Fernán Amado 著者アマドの父親)のオフィスが盗聴されているという匿名の電話があったり、レベロ(Rebello)総司令官のオフィスばかりか私邸の電話まで盗聴されているという報道がなされたりして、大スキャンダルに発展した。上院での質疑で、大臣とアマドの執務室に盗聴器を仕掛けたのはアゲロンド将軍(Mario Aguerrondo)であることをブリト(Mariano Brito)国防大臣は認めた。動機はアルティガス警備隊の正体を突き止めるためであるとされたが、野党の議員たちは納得しなかった。総司令官のオフィスと私邸に盗聴器が仕掛けられた理由については、大臣は答えなかった。ガルガノ(Gargano)上院議員の「軍の中に司令官に対して盗聴器を仕掛ける自由を持つ軍人があることはゆゆしき問題である」という指摘はもっともである。上院は全会一致で真相究明と責任者処罰を求めた。しかし、この件を利用して、ラカジェ大統領は国防大臣、アゲロンドだけでなく、レベロやアマドまで更迭して、軍部人事を刷新し、軍への統制を回復しようとした¹¹。

また1992年11月にはベリオス事件が起きている。これは、元チリ秘密警察のメンバーであるベリオスに、アメリカ合衆国で起きたレテリエル(アジェンデ政権の国防大臣・外務大臣)爆殺事件の裁判で証言させまいとしてウルグアイに逃れさせたが、監視の際について

ベリオスが警察に駆け込んだのちに行方不明となった事件で(のちに身元不明遺体が彼のものと確認された)、大きなスキャンダルとなった。

1-3. 伝統政党の文民政権と司令官任命・将軍昇進人事

アマドは軍内部の昇任ルールについて、①将軍の空席を埋めるときは同じ部隊から選抜する¹²、②同じ能力なら年功序列¹³、であると述べている。また、司令官人事は2月に決定されるが、大統領就任年(就任式は3月1日)の人事は現職大統領と次期大統領が相談して決めるという¹⁴。

しかし政治家の側から見れば、護憲派である(=クーデターを起こさない)ことや信頼できる人物であることのほうが、年功よりよほど重要であろう。コロラド党と国民党の政権は、司令官人事や将軍の昇進を通じて、軍部をどのように統制しようとしたのか。軍との民政移管交渉の結果として誕生した第一次サンギネッティ政権(コロラド党)は、軍人の訴追に反対したメディナをのちに国防大臣に任命したことからもわかるように、軍に融和的であったといえよう。

アマドは歴代政権の司令官と将軍の昇任人事について、党派的親和性(与党支持者か否か)と年功序列の2つの観点から検討している。それらを表にまとめたものが文末の表1～9である。ラカジェ政権の下で将軍に昇進した者の一覧は表2である。一見、コロラド党と国民党のシンパが同数昇進しているように見えるが、国民党の場合は年功序列で20位以下が3人昇進しており、そのうち1人は序列31位である。アマドはこれを「軍の白色化」(国民党の元の名はブランコ=白の意である)と呼び、これは軍の反感を買ったという¹⁵。なぜなら、男子普通選挙が実現した20世紀初頭からラカジェ政権発足まで、国民党が第一党になったことは2回しかなかった。寄らば大樹の陰、軍内ではコロラド党のシンパを見つけることは容易でも、国民党のシンパは少なかったのである。

アマドによれば、第二期サンギネッティ政権(1995.3-2000.2)はラカジェよりも年功を重視し、軍の内部ルールを尊重している。陸軍司令官4人については年功序列1位が2人、3位が2人である(表3)。1996-2000年では12人が将軍に昇進しており党派的にはコロラド党シンパが多いが、年功序列10位以内が7人と半数以上を占め、11-20位までは5人、それ以下は1998年に昇進したメディナ(Tomás Medina)の26位だけである。同じコロラド党のバジュエ政権(Jorge Batlle, 2000.3-2005.2)でも、サンギネッティほどではないが年功序列は重視されているとアマドはみている¹⁶。むしろ国民党シンパを序列21位であるにもかかわらず将軍に昇進させているほどだ(表6)。陸軍司令官にかんしてはすべて序列1位である(表5)。

2. 拡大戦線と軍部

2-1. バスケス政権と軍部

かつてウルグアイの軍部は、ツパマロスのような武装ゲリラだけでなく、合法政党である共産党の構成員や労組活動家なども敵とみなし、強制失踪させてきた。2009年の大統領・国政選挙では、元ゲリラや共産党、社会党を含む左派の拡大戦線が過半数の票を得て与党となった。軍部はかつての「敵」の統制に服することになったわけである。軍も疑心暗鬼になったが、拡大戦線の側も「将軍昇進は『候補者の上位1/3から選ぶ』という軍組織法を変えない限り、選ばれるのは反動軍人ばかりになってしまう」事態に直面していた¹⁷。表7・8はバスケス政権時代の昇進者リストであるが、年功序列で見るとかなり低いランクの軍人が昇進している。アマドはバスケス政権で高位軍人の昇進を決定したのは、①フリーメーソンの会員であること、②軍政時代の拘禁・強制失踪被害者の家族であること、③拡大戦線とかかわりがあること、だと指摘している¹⁸。アマドによれば、ラカジェ政権、第二次サンギネッティ政権ではフリーメーソンの将軍は各1人しかおらず、バジュエ政権でも2人、陸軍司令官では誰もいないのに対し、バスケス政権では15人中8人、陸軍司令官も2006年就任のディアスがフリーメーソンである。バスケスがフリーメーソンで会員なので、同志を信頼しているというわけだ¹⁹。

バスケス政権の初代国防大臣ベルッティは、軍政時代は左派の囚人の弁護を務め、大統領が信頼する人物であった。国防省内の制服組は彼女を「お飾りの大臣」にしておくために様々な抵抗を試みたが、拡大戦線は民政移管以降初めて、単独で議会過半数を制した政権だったので、ベルッティそれをバックに、決して部下のいいなりにサインをせず、省内を改革し、だれが国防省のトップなのかをわからせた²⁰。

2-2. ムヒカ政権の政軍関係：元ゲリラと軍の蜜月？

2012年5月4日付でアルゼンチンのテレビ局が放映したムヒカ大統領の夫人にして元ゲリラの同志ルシア・トポランスキ(Lucia Topolansky)上院議員のインタビューは、大きな批判を巻き起こした。彼女は「アギーレは信用できる。(クーデターを防ぐために)今は将官の1/3、下士官の半数は我々の側だと思うが、すべてに我々の側に立ってほしい」という趣旨の発言をしたのである。これにはウィドブロ国防大臣が即座に「アギーレは専門性ゆえに昇進した」とトポランスキの発言を否定するコミュニケを出しただけでなく、アギーレの同名の父親(ベルッティの元アドバイザー)や、ムヒカ就任時に国防大臣に任命したロサディリャ(Luis Rosadilla)などからも非難の声があがった。しかし、ムヒカ大統領は1年近くたってから夫人を援護する発言をした。「戦略的地位には我々に近い軍人をつ

ける」今、軍では右派が優位なので、それと反対の将官・兵士がクーデターを防ぐ保障になる」と。また、「内務省と国防省を掌中にして初めて、こん棒を手にして初めて、執行権力が組織される」とも述べている²¹。いかにも老獪な政治家である。実際、ムヒカは自派MPPから内務大臣(ボノミ、Eduardo Bonomi)と国防大臣を任命している(2010年3月1日からはロサディリャ、Luis Rosadilla。彼の病気退任によってウィドブロが2011年7月18日に就任。兩人とも議会の国防委員会メンバー経験あり)。

軍と元ツパマロスたちは、かつての武装闘争とそれに対する反騒乱作戦を「戦争」とみなしているようである。そしてともに「よく戦った」と考えているかのようである。ムヒカは2010年3月16日に行われた軍の式典で、「今日の軍は人民に対し、過去の重荷を背負う必要はない」「ともに貧困と闘おう」と呼びかけたという。そして当時空軍司令官だったボニージャは、かつて空軍が取り上げたツパマロスの旗を「未来を向いてほしくて」とムヒカに返したという。「ムヒカ氏に、ではなく最高司令官たる大統領に返却した」というボニージャ²²。かつて敵同士だった日米の老兵たちの交流に通じるものがあるといえないだろうか。

2-3. 軍政期人権侵害問題と元ツパマロス：ウィドブロの問題発言

軍・警察は1973年6月28日のクーデター以前から、国家の敵とみなした人物を逮捕・拷問してきた。1972年4月16日には合法政党だった共産党の建物に突入して双方に死者を出した。軍政期は、国民を危険度に応じて4つのランクにわけて監視し、国内外で「国家の敵」を誘拐した。こうした人権侵害問題、とくに強制的に失踪させられた人々の行方がいまだにわからないことは、軍と市民社会の間に大きな問題として横たわっていた。

ウルグアイに強制失踪の問題が存在する、ということ公式に認めたのはJ・バッジェだが、彼の「平和のための委員会」では、問題解決につながるような実質的な進展はなかった。失効法に守られてきた人権侵害加害者の真相究明と訴追が実現したのは、バスケス政権の時である。2005年には、軍の施設から共産党員で1978年に失踪したチャベス・ソサ(Ubagesner Chaves Sosa)の遺体が、強制失踪被害者としては初めて発見され、同年には1975年に強制失踪したF・ミランダ(Fernando Miranda)共和国大学法学教授(拡大戦線現代代表の父)の遺体も見つかった²³。そしてバスケス政権下で、軍人や警察官ではないので本来失効法の対象ではないのに長い間裁かれてこなかったブランコ(Juan Carlos Blanco)元外務大臣やボルダベリ元大統領(Juan María Bordaberry)といった文民が訴追され、さらには軍政期に大統領を務めた軍人アルバレス

(Georgio Alvarez)が訴追された。ブランコはエレナ・キンテロス(Elena Quinteros)殺人事件で懲役20年、ボルダベリとブランコはミケリニ(Zelmar Michelini)、グチエレス・ルイス(Gutierrez Luiz)らの暗殺で懲役30年、アルバレスは37人のウルグアイ人をアルゼンチンで暗殺したかどで懲役25年の有罪判決を受けている²⁴。

ムヒカ政権下でも、2010年10月21日に、1977年に67歳で強制失踪したフリオ・カストロ(Julio Castro)の遺体が見つかっている。頭に銃弾を撃ち込まれて「処刑」されたカストロの遺体の状況は、「(死んでしまった被害者は軍が意図的に殺したのではなく)やりすぎただけ」というかねてからの主張を一蹴した、とレサは指摘する²⁵。そして、カストロ発見の直後といてもいい、2010年11月8日に現役軍人としては初めてミゲル・ダルマオがニビア・サバルサガラヤ(Nibia Sabalsagaray)殺害容疑で逮捕された(2013年5月に懲役28年の有罪判決)。バスケスの肝いりで昇進したダルマオの逮捕は、彼とよい関係を築いていたというベルッティらを当惑させた²⁶。

しかし、ムヒカは軍政期人権侵害の訴追に消極的だった。彼は「80歳の老人が牢屋につながれているのは見たくない」といって軍政期人権侵害で訴追されていた退役軍人たちを自宅軟禁にしようとした²⁷し、訴追を望む人々を、恨み根性を持って過去にとらわれすぎている、と考えている節がある²⁸。ウィドブロに至っては、完全に軍と歩調を合わせ、同一化している。彼は失効法を無効化する法令の採決を棄権して、上院議員を辞職した²⁹。さらに、軍政期人権侵害問題に取り組んできた「平和と正義への奉仕(SERPAP, Servicio Paz y Justicia)が年次報告で「ウィドブロが国防大臣であり続けていることは、政府が独裁時代の犯罪の調査を進展させる意思がないことの表れ」と非難したのに対し、「もし私に拷問してもいいと許可してくれるなら、拷問で情報を引き出して見せる」「SERPAJは愚か者で、米国帝国主義から金をもらっている、ナチに近い存在」と暴言を吐いた³⁰。当然大問題になり、人権団体らは大臣辞任を要求したが、ウィドブロは辞任せず、第二次バスケス政権でも国防大臣に留任した。

かつての被害者であったウィドブロがたとえ国防大臣であっても軍の側にたつて被害者側を罵ったのは異常であり、ヘルマン事件判決で米州人権裁判所に要求されて、国家を代表してしぶしぶ謝罪したムヒカ³¹のエピソードと並んで、まったく奇妙である。

おわりに

軍政期人権侵害の問題は依然として、軍と市民社会、軍と左派政党の間にひっそりと横たわっている。だが、民政移管して30年以上が過ぎた。軍も世代交代が進み、軍政時代には入隊していなかった軍人が主流となりつつある。軍政期人権侵害のかどで訴追されても、かつ

ては制度を脅かす危機だったかもしれないが、若い軍人にとっては、退役したOBの問題でしかないのではないだろうか。

ウィドブロの後任の国防大臣は第一次バスケス政権で国防次官を務め(2008年まで)、ムヒカ政権でも2011年から国防次官であったメネンデス(Jorge Menéndez)だ³²。彼は就任早々、4日間に2基のヘリコプターが墜

落するという危機に見舞われた³³。装備が古く役に立たない、というのはソトマヨールのウルグアイPKOに関する論考でも指摘されていた(ハイチで墜落事故を起こしている)³⁴。ウルグアイ軍にとっては、なによりもまず、財政的に厳しい中で古ぼけた装備をいかに更新していくかということが焦眉の課題であろう。

表1 ラカジェ政権における陸軍司令官昇進：党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
1990	ギジェルモ・デ・ネバ	コロラド党	1位
1992	ファン・M・レボロ	国民党	4位
1993	ダニエル・ガルシア	コロラド党	3位

出所：Amado, *op.cit.*, p.51, p.139より作成

注：1990年の人事はサンギネッティとラカジェの合議による。

表2 ラカジェ政権における陸軍將軍昇進：党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
1990	イェルトン・バグナスコ	国民党	2位
1990	フリオ・C・ルッジエロ	コロラド党	6位
1990	ラウル・メルモット	コロラド党	11位
1990	ネストル・ベルトリン	国民党	15位
1990	マリオ・アグエロンド	国民党	22位
1992	フェルナン・D・アマド	コロラド党	1位
1992	ルイス・A・アブラハム	国民党	27位
1992	ヤマンドウ・セケイラ	国民党	5位
1992	ルイス・ビレス	コロラド党	12位
1992	アウレリオ・アビジェイラ	国民党	11位
1993	オスカル・ベレイラ	コロラド党	14位
1993	マヌエル・フェルナンデス	国民党	31位
1994	ファン・レサマ	コロラド党	12位
1995	ファン・ゲイモナト	コロラド党	1位

出所：Amado, *op.cit.*, pp.51-55, pp.138-139より作成

注：1990年、1995年の人事はサンギネッティとのラカジェの合議。

表3 第二次サンギネッティ政権における陸軍司令官昇進：党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
1995	ファン・クルチュット	コロラド党	1位
1996	ラウル・メルモット	コロラド党	3位
1998	フェルナン・アマド	コロラド党	1位
2000	ファン・ゲイモナト	コロラド党	3位

出所：Amado, *op.cit.*, p.59, p.140より作成

注：1995年はサンギネッティとラカジェ、2000年はサンギネッティとバッジエの合議。

表4 第二次サンギネッティ政権における陸軍將軍昇進：党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
1996	カルロス・ダネルス	コロラド党	1位
1996	ラウル・ビジャール	国民党	13位
1997	サンティアゴ・ボモリ	コロラド党	7位
1998	アンヘル・ベルトロッチ	コロラド党	2位
1998	フランシスコ・ウインス	コロラド党	4位
1998	ロベルト・アルバレス	国民党	5位
1998	ファン・コルドバ	コロラド党	17位
1998	トマス・メディナ	コロラド党	26位
2000	マヌエル・サアベドラ	コロラド党	1位
2000	リカルド・ゴンサレス	コロラド党	9位
2000	ルベン・バルネイクス	不明	14位
2000	ワルター・ディアス・ティト	コロラド党	19位

出所：Amado, *op.cit.*, p.60-63, p.140より作成。

注：1996年はサンギネッティと国民党の領袖ボロンテとの合議による (Amado, *op.cit.*, p.60)。

2000年はサンギネッティとバッジエの合議。

表5 バッジエ政権における陸軍司令官昇進：党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
2001	カルロス・ダネルス	コロラド党	1位
2004	サンティアゴ・ボモリ	コロラド党	1位
2005	アンヘル・ベルトロッチ	コロラド党	1位

出所：Amado, *op.cit.*, p.64, p.141より作成。注：2005年はバッジエ単独で指名。

表6 バッジ政権における陸軍将軍昇進：党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
2001	エクトル・イスラス	不明	4位
2001	ファン・C・コウトウレ	不明	17位
2001	エベル・フィゴリ	国民党	21位
2002	カルロス・ディアス	国民党	18位
2003	ファン・ジオレロ	不明	3位
2003	ダルド・グロッシ	不明	2位

出所：Amado, *op.cit.*, p.64.p.141より作成。

表7 バスケ政権における陸軍総司令官昇進：推定される党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
2006	カルロス・ディアス	国民党	8位
2006	ホルヘ・ロサレス	国民党	12位

出所：Amado, *op.cit.*, p.65.p.143から作成

表8 バスケ政権における陸軍将軍昇進：推定される党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
2005	ミゲル・ダルマオ	国民党	15位
2006	ラウル・グロツドフスキ	コロラド党	5位
2006	ルイス・ペレス	コロラド党	6位
2006	ダニエル・カステラ	伝統政党	17位
2006	ホルヘ・ロサレス	国民党	27位
2006	ワイル・ブルチャー	伝統政党	29位
2006	ペドロ・アギーレ	国民党	75位
2007	セルヒオ・ドリベイラ	伝統政党	56位
2007	ファン・A・ビジャグラン	伝統政党	11位
2007	フェリシオ・デ・ロス・サントス	伝統政党	22位
2007	ミルトン・E・イトゥアルテ	伝統政党	26位
2007	ネリス・コルボ	伝統政党	61位
2008	ドミンゴ・モンタルト	伝統政党	31位
2009	ネルソン・ピントス	伝統政党	66位
2009	ホセ・マリア・プロネ	伝統政党	8位

出所：Amado, *op.cit.*, p.66.p.143から作成

表9 ムヒカ政権前期における陸軍総司令官昇進：推定される党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
2011	ペドロ・アギーレ	国民党	6位

出所：Amado, *op.cit.*, p.67.p.144から作成

表10 ムヒカ政権前期における陸軍将軍処す院：推定される党派的親和性と年功序列

昇進年	氏名	推定される党派的親和性	年功序列
2011	ファン・サアベドラ	国民党	2位
2012	グイド・マニーニ	コロラド党	20位
2012	カルロス・ロイテイ	伝統政党	24位
2012	マルセロ・モンタネール	コロラド党	28位

出所：Amado, *op.cit.*, p.68.p.144から作成

注

- 1 Fernando Amado, *Bajo sospecha: militares en el Uruguay democrático*, Random House Editorial Sudamericana S. A, 2013
- 2 内田みどり「ポスト冷戦期における政軍関係——ラテンアメリカ諸国の事例からの考察」『法学新報』(中央大学)第106巻5・6号、61-91頁、2000年。
- 3 David Pion-Berlin, "Military Autonomy and Emerging Democracies in South America", *Comparative Politics Vol.25, No.1, October, 1992*, pp.87-90.
- 4 *Ibid.*, p.91.
- 5 Arturo C. Sotomayor, *Peacekeeping Contributor Profile: Uruguay*, <http://www.providingforpeacekeeping.org/2014/04/03/contributor-profile-uruguay/> 最終更新2013年5月、2016年10月3日閲覧。
- 6 www.un.org/en/peacekeeping/resource/statics/contributors.shtml, 2016年10月3日閲覧。
- 7 David Kohut, Olga Vilella, & Beatrice Julian, *Historical Dictionary of the "Dirty Wars"*, The Scarecrow Press, 2003, pp.42-43, 杉山知子『国家テロリズムと市民——冷戦期のアルゼンチンの汚い戦争』北樹出版、2007年、170-172頁。
- 8 Francesca Lessa, (Tradición de María M. Delgado) *¿Justicia o impunidad? Cuentas pendientes en el Uruguay post-dictadura*, Editorial Sudamericana Uruguay S.A, 2014. pp.80-84. 失効法制定に至る過程と、1989年の国民投票、バッジェ政権下での「平和のための委員会」設立までの経緯は、拙稿「ウルグアイにおける軍部人権侵害をめぐる政治力学」『国際政治』第131号、49-63頁、2002年にまとめている。
- 9 彼は現在、モンテビデオ県選出の下院議員であり、2014年の国政選挙、2015年の地方選挙を巡りコロラド党の領袖ペド

- ロ・ボルダベリーを公然と批判して袂を分かち、新たな会派を立ち上げた。
<http://www.elobservador.com.uy/amado-lanzo-su-agrupacion-criticas-lideres-colorados-y-novick-n970533>, 12/09/2016, 2016年9月13日閲覧。
- 10 Amado, *op.cit.*, pp.94-99,
 11 *Ibid.*, capítulo 9 *Espionaje militar*
 12 *Ibid.*, p.118.
 13 *Ibid.*, p.127.
 14 *Ibid.*, p.50.
 15 *Ibid.*, pp.50-59.
 16 *Ibid.*, pp.140-141.
 17 バスケス政権発足時の国防大臣ベルッティ (Azcebn Berrutti) のアドバイザーで、護憲派の退役軍人アギーレ (Pedro Aguirre) の発言。 *bid.*, pp.206-207.
 18 *Ibid.*, p.325.
 19 *Ibid.*, pp.282-285.
 20 *Ibid.*, pp.212-217.
 21 *Ibid.*, pp.218-224.
 22 *Ibid.*, p.261, pp.286-288.
 23 Lessa, *op.cit.*, p.105.
 24 *Ibid.*, pp.104-105.
 25 *Ibid.*, p.123, p.124.
 26 *Ibid.*, p.115., Amado, *op. cit.*, pp.318-320.
 27 アンドレス・ダンサ、エルネスト・トゥルポビッツ、『悪役: 世界で一番貧しい大統領の本音』、汐文社、2015年、77頁。原著はDanza, Andrés & Ernesto Tulboviz, *Una Oveja Negra al poder: Confecciones y intimidaciones de Pepe Mujica*, Editorial Sudamericana Uruguay、2015。
 28 同上、165頁。
 29 Lessa, *op.cit.*, p.118.
 30 <http://www.teledoce.com/telemundo/nacionales/polemica-entre-serpaj-y-huidobro-por-declaraciones-sobre-derechos-humanos/>, Update 22/12/2014, 2016年10月3日閲覧。
 31 <http://www.elpais.com.uy/informacion/huidobro-contraataca-serpaj-son-imbeciles.html>, Update 24/12/2014, 2016年10月3日閲覧。
 32 <https://www.presidencia.gub.uy/comunicacion/comunicacionnoticias/menendez-designacion-ministro-defensa>, Update 05/08/2016, 2016年10月3日閲覧。
 33 <http://www.elobservador.com.uy/nuevo-accidente-aereo-revela-las-carencias-las-fuerzas-armadas-n958142>, Update 17/08/2016, 2016年10月3日閲覧。
 34 Sotomayor, *op.cit.*,

